

業がどのような形でこうした者を次々、育成していくのか等について事例も交え考察している。

第4章、第5章では、それぞれ企業の長期的技術展開戦略にとって必要な「自社技術の体系的把握（自社の技術内容と周辺技術の把握）」、「自社技術の相対的把握（他社と比較した上での自社技術レベルの認識）」の方法について論じている。周辺技術の把握については将来市場の成長性や日々接する顧客の業務内容から把握することが考えられ、その担い手としても「複眼的技術者」が期待されるとしている。

第6章では企業が外部からの「技術の吸収（自社にはない技術を導入して利用すること）」とその「融合（吸収技術と既存技術を組み合わせ、一体化して活用すること）」をどのように取り進むのかについて考察している。そして①外部技術の吸収と融合の過程（特に融合の局面）では複眼的技術者をうまく機能させること、②企業としては、技術の吸収とその融合の両立を図る「業務延長型」となることをまず、目指し、そこから更なる展開を図るべき

ことを説いている。

第7章では複眼的技術者を中心とした①自社技術の体系的把握、②自社技術の相対的把握、③技術の吸収・融合の過程（「技術向上の基本トライアングル」）を適切に機能させるための外部組織との関係構築の重要性について述べている。

先述したように本書は「普通の中小企業」の生きる道をテーマとしている。そうしたこと自体奇妙なことと写るかもしれないが、逆に従来の多くの研究との関係ではユニークである。

一読者としては、あくまで一企業内の複数の分野の技術知識を有するに過ぎない「複眼的技術者」が外部の未知の技術をどのように融合化するのかについての詳しい記述が欲しいこと、また、著者も触れているが、異常値ではない「普通の中小企業」を扱うだけに統計分析が欲しいこと等、将来に向けての希望もあるが、ありふれているからこそ難しい普通の企業の技術向上の試みに焦点を当てた点で興味深い一冊である。



『地域産業の再生と雇用・人材』

■下平尾勲・伊藤維年・柳井雅也 編著

評者

大阪商業大学総合経営学部准教授
糸野 博行

近年、都市部と地方の様々な「格差」について議論されることが多くなった。このことは政治的な問題があるにせよ、地方経済の衰退ならびに地域産業の行き詰まりなどが背景にあることは疑いのない事

実であろう。本書は地域経済の専門家14名が集まり、九州と東北の地域産業の事例などをもとに地域産業の再生問題について書かれたものである。筆者の能力および紙幅の都合から本書の内容すべてに言及す

ることは難しいが、各章を紹介していきたい。

本書の「まえがき」では、「①現状分析に基づいてどうすれば地域雇用を創出できるか、②地域産業の再生を担うのは人材であるが、いかに人材を確保し、育成を図ってゆくのか、③地域産業の再生問題を解く鍵は何か」という課題が提示されている。本書はこの課題に従い三部構成となっており、そこへ全体の概観を述べた序章と総括の終章が加えられたものとなっている。

まず序章では、地域産業・地域経済のおかれている厳しい状況、その要因、地域産業・地域経済の再生のための方策について総括的に論じられている。さらに地域産業・地域経済再生のためには、需要側からの産業振興、連携・協同による地域経済の創造、地域経済再生のための制度や地域を担う人材の育成が不可欠であることを指摘している。

第1部(第1章～第4章)では九州の産業や集積に焦点を当て、産業の再生、新産業の形成と地域雇用の創出・拡大について論じられている。第1章では、北九州市における工業地帯の再編と地域雇用の問題について取り上げられている。第2章では、シリコンアイランドと言われている九州のIC産業について、雇用の実態や動向、今後の展望が考察されている。第3章では、北九州エコタウン事業に焦点を当て、この事業による地域産業の再生、地域雇用の創出および人材の育成について論じられている。第4章では日本一の家具産地である大川家具産地に焦点を当て、産地の再生と地域雇用の現状について分析されている。

第2部(第5章～第8章)では陶磁器産地や観光地での人材育成および地域産業振興策を取り上げ、そこでの問題点が検討されている。まず第5章では、陶磁器産地の特性と人材養成について、備前と旭川が比較分析されている。第6章では観光地の衰退原因と再生について述べられており、観光地の再生・創造に関しては人材の育成が不可欠であることが指

摘されている。第7章では、滋賀・岡山・徳島の3県におけるベンチャー企業振興策を取り上げ、そこでの起業家人材育成の現状ならびに問題点が述べられている。第8章では山形県米沢市における産業支援策の展開と企業間ネットワークにおける人材育成について論じられている。

第3部(第9章～第13章)では、医薬品産業集積地、温泉地などの産業振興を取り上げ、地域産業の再生・活性化の課題や戦略などについて検討されている。第9章では富山県の医薬品産業について分析されている。第10章ではホリスティック・ヒューマニゼーション(包括的な人間性の尊重・追求)という視点から温泉地の活性化について論じられている。第11章ではイギリスにおけるパートナーシップ型の農村再生を取り上げ、内発的な発展をもとに農村再生が可能か検討されている。第12章では、新産業創出のための産官学連携について述べられており、地域ビジネスの創出にはボトムアップ型のコミュニティが重要であるとされている。第13章では島根県斐川町、岩手県北上市、岩手県花巻市の事例を取り上げ、地域産業再生の事例を述べている。

以上をふまえ終章では、①地域の活性化・再活性化を担う人材の育成・確保の重要性、②創造的な作用を共有する様々な「結びつき」「つながり」の重要性、③地域における主体的・主導的な取り組みの必要性、④需要サイドに立った産業振興の必要性、⑤具体的な目標、ビジョン、計画、戦略の必要性、の5つの点が全体を通して確認し得たこととしてまとめられている。

本書の注目すべきところは、地域産業に関する議論の中で従来議論されることの少なかった雇用や人材育成に焦点を当て論じている点であろう。これまで人材育成というと技能の伝承や従業者教育などについて議論されることが多かった。しかし本書では、地域の活性化・再活性化のためには、イノベーションを惹起する経営者、従業員、起業家などの「人材」

と、地域に対する「思い」をもった自治体職員等の「人材」が、絶えず生み出され、交流し力を発揮する必要があると指摘している。

地域の活性化にはそれを担う「人材」が重要であるとする点については納得できるもので、筆者も共鳴するところである。しかし、このような人材がなぜ生まれてきたのか、もしくはどうすれば人材を輩

出できるのか、そのメカニズムの解明が十分になされていない点は残念と言わざるを得ない。特に自治体職員に関しては、その能力や情報は個人に帰着することが多く、地域システムとして根づくことが難しい。どうすればそのような個人の持つ能力や情報が地域システムに活かされるのか、今後この点について研究が深められることを期待したい。